

## 子どものいる風景(3)

# 今、子どもたちのあそび場は

—ドイツ・ハンブルク市のあたらしいあそび場—

小林 美実

今回と次回の二度にわけて、新しい屋外のあそび場について書いてみたい。

屋外のあそび場については、二〇〇二年十月号の「冒険あそび場」で、第二次世界大戦後に広まったあそび場を紹介した。いま日本でも、わずかではあるが冒険あそび場やプレーパークがある。少し大きい公園の片隅によくある児童公園や

幼稚園・保育所によくみられる、木材を組み合わせて高い塔やゆるるつり橋やたれさがるロープなどをつけた小屋風の大型固定遊具、綱にぶらさがってわたるケープル、木の間にはられた太い綱や大きな網なども、その影響を受けた遊具だろう。これら冒険・プレーパークでのあそびは、子どもたちにとっては大変魅力的であり、興奮させ



られるものばかりだ。しかしここでのあそびには、多少の危険を伴うのも事実であるが、その危険を克服するスリルは非常にエキサイティングだ。このようなあそびやあそび場が今の日本では歓迎されにくくなっている。もっぱら安全第一で、しかも受身で体を動かさないでも、スリルだけを十分味わうことのできる巨大遊具が商業ベースの遊園地には沢山あるし、人気でもある。ただしこの様なあそび場は、たまに行く特別な娯楽施設、遊園地なのである。

子どもたちが、できれば家の近所で、勿論無料で、日常的にあそべるような場所が、本当に楽しいエキサイティングなあそびができる所だったらどんなにいいだろう。そこはどんな所で、どんな遊具があったらいいのだろう。子どもたちがあそびたくなる、あそびが作りだせる、あそびの仲間ができる、そんなあそび場を考えてみたい。あそび

を忘れてしまった大人にとって、そんな場所を想像するのはむずかしいかもしれないが。今、あそび場を作り提供できるのは大人。しかしあそびを創るのは子どもであることを忘れてはならない。

子どもは広い空の下、ひろびろとした所に出るとどうするか。まず、その広さを体いっぱい試みかけて確かめるように走り出すだろう。そしてその子も笑い顔になるのが面白い。ひとしきりかけまわると、まわりをみまわす。「なにか面白いものみつけ」、である。だからそこに子どもの好奇心、探究心のエネルギーを受けとめて、豪快なあそびを生み出せるような場所、そして遊具やしかけがあったらどうだろう。そんなあそび場を、私はドイツで発見した。そこは残念ながら街中にある小さな児童公園ではないが、どのような規模のあそび場であれ、共通するものが沢山ここにはあると感じた。

二〇〇一年、十月号では、私がハンブルグ滞在中何度かおとずれた市の中心にある大きな市営の公園での催し、子どものための「音、音楽、あそび」のフェスティバルについて、少しふれた。この公園は大変広く、いろいろなエリアがある。

ちょうど五月六月は花の季節。中でも多様な色、大ききで一面に豪華に咲きほこる石楠花はみごとだ。巨木の下に群れて咲く、小さな青や紫や黄色の花々は可憐で美しく、新緑の木々の茂みの中では、盛んに小鳥のうた声が聞こえる。大きな池には、噴水が踊り、周りのテラスや芝生のスロープでは、もう仕事をリタイアしたと思われる年齢の人々が、コーヒーを飲みながらゆったりとすごしたり、散歩したりしている。頭にスカーフをかぶり、小さい子どもを何人か連れて芝生ですごしているイスラム圏の国から来た人々もよくみかけた。これが普段のこの公園で見られる、子どもた

ちが学校や幼稚園などに行っている日の風景である。はじめのうち、子どもの声も聞こえず、私はこの花々の奥に、エキサイティングな子どものあそび場が新しく造られていた事に気づかなかつた。しかも休日といえ、近郊の古い町、森、田園地帯をぶらついていて、この公園の週末の子どもたちがあそぶ様子を知らず、ここでは私はすっかり老人の仲間入りをしていたわけであった。

フェスティバルの時だった。会場になっている池のまわりの芝生の広場、バラ園、野外音楽堂、森をまわって帰りかけたとき、子どもたちの楽しそうにはしゃぐ声が聞こえてきた。この公園にある立派な日本庭園の裏からだった。急いで行ってみると、幼児から小学生ぐらいまでの子どもと、その付き添いのおとながいっぱいいて、子どもたちが活発にあそびまわっていた。そこには子どもが公園というと必ず置かれている固定遊具、たと

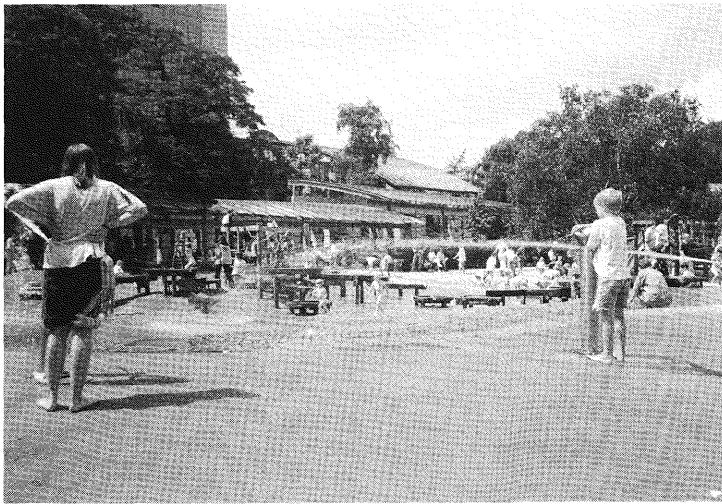
えばブランコ、滑り台、砂場などの遊具は勿論、プレーパークにあるようなものも見当たらない。まず、目の前に広がる水のおそび場の面白さに思わず笑顔になってしまった。まだ気温が二十度というのに、すっ裸であそぶ子ども。多分夢中になってあそぶうちに、びしょびしょになってしまったのだろうか。水のなかの柵のような一本橋を目でたどっていくと、その先には妙な木造の家がいくつか建っている場所がある。入り口のない家、壁が太い綱でできている家などさまざまだ。その右手の広場には、黄色の高い山が、茶色の山々を伴って、二つにそびえている。これまた天辺から水が流れていたり、山脈の部分の上部には水溜りもあるように、子どもが水しぶきをあげている。そして山の右下の広場にあるいくつかの固定遊具も大変ユニーク。長い鉄板のビヨーンとうなって波打



▲兄が手こぎポンプで水を出すと、弟が手で水を受けて喜んでいた。水は木の溝を伝わったり、そのまま石だたみを流れて、下の水たまりへ入る。井戸のまわりは、びしょびしょだ。

つ廊下風遊具。太い縄が輪になっていつぱいつりさがっているものなど。どれもスリル満点なあそびができる。多分日本では許されないのではないか、と思った。

まず私がみたのは、広い変化に富んだ水遊びのエリア。子どものあそび場に水場をつくって幼児でもあそべるようにした公園は、日本でも多く見られるようになった。しかしこの場所はまったくちがっていた。まず水場全体がフラットでない。なだらかな起伏あり、でこぼこがあり、だからあちらこちらにいろいろな水の流れがあり、水溜まりがある。プールのような泳ぎはできないが、それ以外の、小さい子どもたちがしたいと思う水のあそび、水とのふれあいが、思いきりできるところなのだ。なだらかな広い坂一面にさらさらと気持ちよくきれいな水の流れているところでは、一、二歳の子どもが



▲大きい子どもに人気の水鉄砲。右から水を飛ばしている子どもと競争を始めようとしている子ども。水あそびの場所が起伏に富んでいることがよくわかる。



▲むこうの通路（これは市の会議場などへ通じる廊下）の下から流れて来る小川。小さいダムが2つ作ってあった。泥水の中では、妙な道具を動かして、盛大に水をかきまわしていた。

水にそつとさわったりピシャピシャたたいたりしている。やがてその流れにすわってにっこりして、母親を見る。母親も楽しそうに笑顔を返す。兄が手こぎポンプの井戸で水をこぎだすと、弟がその水の気持ちよさそうに手で受けて喜んでいる。水は、木製の長短の溝を伝わって、あちらこちらに流れていく。その先の水溜まりに落ちるところでは、子どもたちが水の中でよくやっているあそび、水をかけあったり、とばしたり、おいかけごっこをしたり、しぶきをあげてはねまわったりしている。公園の横の通路の下から、土を少し掘っただけの溝が水が流れてくる。コンクリートや石でかためてないから、子どもたちが少しだけ流れを変えたり、小さいダムをつくったりできる。その流れの先は、泥水の溜まり場だ。この中で、円盤型の遊具にのっ

て、この泥水を盛大にかき回している子どもたちがいる。

水が流れ込むしかけはもつとある。少し大きい子どもたちが一番好きなあそびは、水鉄砲。低い柱の上に取り付けられた丸みをおびたピストル。

これが水鉄砲で、少し高くなったところに数箇所とりつけてあった。水の飛び出す力は半端でない。しかも上下左右に少し動くようだ。まともな体に当たると痛いだろうが、決してほかの子どもに当たったりしない。付き添いの大人たちが多いこともあるだろうが、(ドイツの大人は今も決して甘くない。他人の子どもにも、大人にも、臆せず注意する) 混んでいるといっても、結構空間があるのも幸いしていると思うが。木の柱や石だたみをねらって、あてっこが始まる。猛烈に飛ぶ水の下をくぐりぬけるのもスリル満点のあそびだ。お父さんたちにとっても水鉄砲は魅力的だ。子ども

がいなくなると、待つてましたとばかり大人がとりついて、嬉しそうに水を飛ばして笑いあっている。このあそび場では、子どもも大人も、知らない者同士がすぐあそび仲間になってしまう。あそびの楽しさを共にする仲間が自然にできてしまうようだ。楽しさを共有する、とはこうゆうことなのだろう。

ちよつとした木製の高台や長短の一本橋が水の中にある。そこでも子どもたちはいろいろなあそびをしている。高台の上ではおしゃべりをしている子どももいる。ゆつたりまわりを眺めたり、日の光にあたるのを楽しんだりする時間をすごせる場所があるのもいい。

このあそび場を考えついた人、デザインした人は、どんな人だろう。きつと子どもの時、いっぱい水遊びをし、その楽しさを今も忘れていない人なのだろう、と思った。(元宝仙学園短期大学)